ショコラティエは恋に蕩ける　発売記念　特別ショートストーリー

『長らくお待たせしていたものがついに完成したので、明日の夜、俺のショコラトリーに来てください』

隆一からそんな電話があったのは、昨日のことだ。

「長らくお待たせしていたもの？」

悠が訊くと隆一は『見れば思い出しますよ』と意味深に返してきた。

一体なんのことかわからなくて、悠は首を傾げる。

クリスマスが近くなり、ショコラトリーは繁忙期に突入している。そんな時期にわざわざ呼びつけるくらいなのだから、もしかするとよほど急ぎの用事なのかもしれない。

そう思って悠は隆一に促されるままに、銀座にある隆一のショコラトリーに向かった。

「隆一、来たよ」

裏口から厨房に入ると、もう隆一以外誰もいなかった。

悠も自分の店を閉めてから来たので、時刻は深夜に近い。

「先輩、こっちです」

隆一は作業していた手を止めて、店内に向かった。

その足取りが妙に軽くて、悠は訝る。

「一体なんなの？　――え？」

突如悠の目に、とんでもないものが飛び込んできた。

サロン・ド・テのど真ん中に、尻の形をしたチョコレートのオブジェが飾られていたのだ。

アンティークの台の上で、露骨に尻の部分だけをかたどったチョコレートが、絶妙なバランスで直立している。

「いかがですか？　先輩の尻でシミュレーションさせていただいたオブジェが、ついにできあがったんです。原寸大ですよ。この突き出した尻の美しいラインを出すのに、約一年かかってしまいました。最後はもう執念です」

堂々と語る隆一に、悠は声を荒らげた。

「どや顔するな！　ってかこの忙しい時期に、お前は何してるんだ！」

隆一は悠と再会して間もない頃、デザインから全て手がけてチョコレートで尻形のオブジェを作ると言っていた。けれどまさか本当に作るとは思ってもみなかった。

隆一は悠の非難を受け流して続ける。

「配置もとてもいいでしょう？　サロンの真ん中に置けば、いつでも三百六十度尻が見渡せます。本当にこれは、先輩の尻そのものですよ」

隆一はゆっくりとオブジェの周りを歩きながら、舐め回すようにそれに視線を這わせた。

自分の尻なんてまじまじと見たことはない。けれど尻フェチの隆一が、こんなにも得意げに

見せつけてくるくらいだ。そっくりなのだろう。
そう思うと、なんだか急に恥ずかしくなってきた。
「み、見るな！」
悠はオブジェの飾り台に抱きついた。まるで隆一に自分の尻を晒しているような錯覚がしたからだ。
でもそのオブジェは、芸術品と言ってもおかしくないものだった。いやむしろ、そう表現するのが相応しい、美しい造作をしている。
チョコレートの艶といい、滑らかな質感といい、ショコラとしても完璧だ。
けれどやっぱり、自分はこんなふうに隆一の前で尻を突き出していたのかと思うと、どうしても羞恥を感じてしまう。
「先輩、本末転倒ですよ。模倣を隠して、本物を見せるなんて」
「ひっ」
オブジェに覆い被さる悠の背後から、隆一が尻を鷲掴みにしてきた。
しまった。隆一に背中を向けるのは自殺行為だった。
「相変わらず先輩の尻は、極上の触り心地ですね。何時間でも揉んでいられます」
「ばかっ、やめっ」
隆一は、暴れる悠の耳に唇を近づけてくる。
「このオブジェ、ちゃんと食べられるんですよ？」
「え……お前これ、食べる気……？」
「はい、もちろん。こんなにおいしそうな尻を目にして、俺が何日も我慢できるはずありませんから」
「嘘だろ……」
変態すぎる。
青ざめていると、隆一が唆してくる。
「でも、もし今ここで、先輩の本物を食べさせてくれるなら、俺はこれを食べるのはやめますよ」
「え……」
悠は葛藤した。どっちを選んだって、隆一の思うつぼだ。でも、自分の尻そっくりなオブジェを食べられるほうが嫌かもしれない。
「先輩、どうします？」
隆一は愉しそうに選択を迫り、背中に張りついてくる。
以前の悠なら、すぐに隆一を変態だと罵って、どっちもはねつけていたはずだ。悠の肖像権を無視したオブジェは、ぶっ潰していたかもしれない。
けれど今はもう、悠は隆一が好きだ。

隆一も、悠の全部を好きだと言ってくれた。
悠は振り向いて、隆一を見上げる。
「俺のこと、尻だけじゃないよな……？」
今一度確認しようとすると、隆一はぱちぱちと瞬きをした。
「先輩、まだそれ疑ってるんですか」
「だって隆一が尻フェチすぎて……」
どうしても訊かずにはいられなかった。
隆一は悠の顎を掴み、唇を重ねてくる。
「んっ」
「それなら今から、俺がどれだけ先輩の全部を好きか、実感させてあげますよ」
捏ねるように尻を揉みしだかれて、悠はわなないた。
「尻揉みながら言われても、説得力ないんだけど！」
やっぱり隆一は、悠の尻だけが目的なのかもしれない。
不信感を露わにすると、隆一はいつもショコラを見つめる一途な瞳で悠を射貫き、甘く囁いてくる。
「愛しています、先輩」
「……う」
ずるい。大好きな男にそんなことをストレートに言われたら、もう尻フェチの変態でもいいって思ってしまう。
悠はたった一言で簡単にほだされてしまった。
きっと全部、惚れた弱みだ。
「俺も好き……」
小さな声で口にすると、隆一は悠の尻を撫でながら、愛おしそうにもう一度キスをした。

――尻形オブジェはふたりで話し合った結果、悠が引き取ることになり、今は折原家の和室に飾られている。